
異世界で生活するには

悠久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で生活するには

【Nコード】

N3368Z

【作者名】

悠久

【あらすじ】

異世界モノです。

主人公が異世界に飛ばされる所から物語は始まります。

処女作ですので、至らぬところがあればご指摘お願いします。

また、更新は不定期になると思います。

プロローグ

俺の腕の中に少女がいる。

少女の表情は驚愕に染まっている。

「どうして……」

少女は呟いた。

俺はその呟きに答えようとして、出来なかった。

俺の胸のあたりに大きな穴が空いているのだ。

そこから血がどんどん溢れてくる。

こりゃあ死んだなあ、なんて思いながら、今にも泣きそうな顔をしている少女を安心させてやろうと笑みを浮かべた。

少女は俺に何か言っているようだったが、聞き取ることもできずに意識が闇に沈んでいった。

朝。

俺は、幼馴染の紀野結城きのゆづきと一緒に登校中だ。

「悠利、最近ぼーっとしてること多いけど、何かあった？」

「なんだよいきなり。心配してくれてたのか？」

そう尋ねると、結城は顔を赤らめながら言った。

「そ、そんなわけないじゃない！……でも、なんだか気になっちゃって」

結城は相変わらずツンデレだなあ、なんて考えながら、

「そっか。でも、気にするようなことは何も無いよ。安心して」

俺は結城の頭を撫でた。

結城は俺よりも身長が頭一つ分低く、手を乗せるのにちょうど良い位置に頭がある。

結城は顔を赤くしながら、俺にされるがままになっている。

「そろそろ行こうか。このままだと遅刻する」

そう言い、結城の頭から手を離すと、結城は名残惜しそうに俺の手を見つめていた。

放課後。

今日は授業は午前中だけだったので、午後は授業はない。

クラスメート達はこれから遊びに行く相談をしていた。

俺はさっさと帰る準備をして席を立った。

教室を出て玄関に向かってしていると、結城がやって来て言った。

「一緒に帰る？」

「すまん、今日はバイトがあるから一緒に帰れないんだ」

俺がそう答えると、結城は残念そうに、

「じゃあまた今度ね」

なんて言ってきた、俺はそれに頷いてバイト先である喫茶店へ向かった。

バイトが終わり、帰路についた。

ついでに晩飯の買い物をして、家へと続く道を歩いていると、突然目の前に黒い球体が現れ、俺を呑みこんだ。

「な、なんだ!??」

俺は思わず叫んだ。

だが、叫んだだけでどうにかなるわけではもちろんなく、意識を失ってしまった。

プロローグ（後書き）

誤字・脱字、その他あればご指摘お願いします。

目覚めたら森

目覚めると、俺は森にいた。

「何で俺は森にいるんだあゝ!!」
とりあえず叫んでみた。そしてすぐに後悔しました、しまくりましたとも。

背後の草むらからゲームに出てくるスライムのような生き物が出てきたのである。

十匹程が俺の周囲を囲むように出てきたため、逃げることもできない。

どうする!?!どうするよこれ!?!

とりあえず、足元に落ちていた木の棒を拾って、構える。

正面に陣取っている一匹のスライムが飛びかかって来たので、思いっきり叩き落とす。

すると、あっさり倒れ、そのまま煙となって消えていった。

「……弱い」

思わず呟いた。

スライム達は、俺の言葉に怒ったのか今度は同時に俺を攻撃してきた。
た。

俺は、スライム達の攻撃をかわすことなく全員叩き落とした。というかわす必要も無かった。当たっても全然痛くないのだ。

最初に俺に倒されたやつと同じように、スライム達は煙になって消えた。

「倒したはいいけど、何処なんだここ?なんか見たこともない植物もあるし……ん?」

スライム達が消えた所に何か落ちている。

拾ってみると、それはお金だった。しかも日本円。

「スライムを倒したらお金が出てきた、ってことになるのか？なんか気持ち悪いな……まあもらっておくけど」
「丁度所持金が無かったので、全部拾った。全部五百円玉だったので、所持金は五千円になった。」

他にも何か落ちていたので、拾ってみると、

「……当たり券？」

なんでスライムから当たり券が出てくるんだ？何の券かわからないし……

裏を見てみると、『近くの町のお店で買い物をする時に提示してください。ただし、使えるのは一度だけです』と書いてあった。

「何の当たり券か書いてないし！近くの町ってどこにあるんだよ！」思わず叫ぶ。

すると、突然何かに肩を掴まれた。

「のわ！？」

ふり向くと、そこには銀髪で綺麗な少女が立っていた。

「こんな所で何しているの？」

少女に見惚れていた俺は、少女の問いで我にかえり、

「……俺、迷子なんだ」

正直に答えた。

木の棒で魔物を倒すのは非常識なようです（前書き）

早速お気に入りに登録してくれた方がいました。ありがとうございます。

木の棒で魔物を倒すのは非常識なようです

「迷子？」

少女は問い返してきた。

俺はそれに頷いて、

「そうなんだ。ここがどこかわからなくて困っていた所なんだよ。君、ここがどこかわかる？」

俺が問うと、

「ここはラグリアのすぐ近くの森よ。」

少女は答えてくれた。

答えてくれたのはいいんだけど、ラグリア？聞いたことが無いな。

外国の町だろうか？いや、少女が俺の言葉がわかるということは日本で間違いないと思うが……

とりあえず、町まで行ってみよう。

「申し訳ないけど、そのラグリアまで連れて行ってくれないかな？」
頼んでみると、

「別にいいわよ」

とあっさりOKを貰った。

「そう言えば、自己紹介がまだだったね。俺は天神悠利、ユーリと呼んでくれ」

「よろしく、ユーリ。私はリリス・アドリシアよ」
歩きながら、お互いに自己紹介をする。

リリスの外見は、長い銀髪に紫の瞳、人形のように白い肌で、胸はけっこう大きい。

ストライクと真ん中、って感じで俺の好みだ。

「リリスはラグリアに住んでいるのか？」

ふと気になったので聞いてみた。

「そうよ。でも、最近魔物が増えてきているから迂闊に町の外にも出られないの」

……魔物？

そんなものが出てくるのか？

いや、さつきスライム倒したけど……しかし、日本はおるか、世界のどこの国でもスライムが人を襲ったなんて話は聞いたことが無い。……まさか、ここは異世界なのだろうか……いや、考えても答えは出ないな。それに、魔物が出ると言うのなら、生き残る術を早急に見つけないと。

そう言えばさつき『当たり券』なる物を手に入れたわけだが、リリスに聞いたらわかるだろうか？

「そう言えば、リリスに会う直前にスライムを十匹程倒したら『当たり券』が出てきたんだけど、これどうやって使うんだ？」

尋ねると、リリスは何言っただこいつは、とでも言うような顔をしながらも教えてくれた。

「ユーリ知らないの？当たり券は買い物をするときにお店の人に見せると、その場で一つ商品をくれるのよ」

「すべての店に使えるのか？」

「ええ。武器屋でも防具屋でも道具屋でも、店ならどこでも使えるわ。でも、『当たり券』は魔物を倒さないと手に入らないの。あまり落とさないけどね」

「へえ、そうなんだ。じゃあ俺は幸運だったわけだ」

俺がそう言つと、リリスは、

「ただし、魔物によって当たり券のデザインが違うから、デザインに応じてくれる商品の良さが変わるのよ。残念ながら、スライムの当たり券で貰える商品はあまり上質では無いわね」

などと言った。

「ぬか喜びかよ……」

ちよつと落ち込んだ。

もう少しで森を出られる、って所まで来た時に魔物と遭遇した。

またスライムだった。

「こいつはまかせろ」

そう言つて、俺は持つていた木の棒であっさり倒した……虚しい。例によつてドロップしていった金を拾つて財布につつ込んでいると、リリスが信じられない、とでも言うような顔をしていた。

「どうかしたか？」

尋ねると、リリスは驚きを隠せない様子で、

「倒したのがスライムとはいえ、木の棒で魔物を倒した人なんて初めて見た……」

などと言つた。

……これくらい誰でもできるんじゃないの？と思つたが、驚いていることから察するに今まで誰も木の棒で魔物を倒す、なんて事が無かつたのかもしれない。

まあ、俺の場合、やるしかなかつただけだが……

気をとりなおして、歩いていくと、街道に出た。少し歩いた所に町が見える。

「あれがラグリアか？」

尋ねると、リリスは頷いた。

「そうよ。ユーリはラグリアに着いたら、買い物するんでしょ？案内してあげるわ」

「そいつは助かる。」

さつきスライムを倒したから、所持金は一万三千程になつてはいるが、少々心許無い。

……早速『当たり券』の出番だな……

そう思いつつ、俺はリリースとラゲリアへ向かって歩いていった。

木の棒で魔物を倒すのは非常識なようです（後書き）

あまり長い文を書くのはまだできないので、短いのは勘弁してください。

最後に一言

……スライムは結構沢山お金を落としますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368z/>

異世界で生活するには

2011年12月23日00時46分発行